

## 世界遺産を通してみる「縄文」

根 岸 洋

### はじめに

2021年7月27日、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の開催する第44回世界遺産委員会拡大大会は、「北海道・北東北の縄文遺跡群」を世界遺産一覧表に記載することを決定した。我が国の世界遺産としては25件目となり、文化遺産としては20件目である。先史時代の、それも地下遺構を中心とする遺跡が世界文化遺産として認められたのは日本初のことである（根岸2021）。さらに先史時代や新石器時代のような一般名称でなく、「縄文」という日本列島にしか存在しない「文化」の名称が冠せられた世界遺産としても稀なものと言えるだろう。その価値が認められたことは大変喜ばしいことであるが、推薦対象が列島全域でなく一つの地域であったことが、「縄文文化」概念をめぐる問題を浮かび上がらせている。つまり「縄文文化」とは何か、また世界遺産として推薦されるのに適切な単位とは何かという問いである。

本稿はこれまで「縄文文化」がどのように描かれて来たのかを検討し、世界遺産というフィルターを通して明らかとなったその複層性について考える。また他国にある先史時代の世界遺産との比較を行い、推薦に用いられている単位についても考察する。なお本稿において、カッコ付きで「文化」という場合は考古学による定義（2で後述）を意味し、一般に用いられる意味とは異なることをあらかじめご留意いただきたい。

## 1. 縄文遺跡群と世界遺産

### 1-1. 世界遺産になるまでの経緯

国内に所在する遺跡等の文化遺産が世界遺産一覧表に記載されることを目指すためには、ユネスコが所管する暫定一覧表に掲載される必要がある。これは世界条約の締約国が将来的な世界遺産候補をリストアップする制度である。日本の場合は文部科学省に設置される文化審議会による審査基準に従って選ばれることが定められており、文化庁が2006年より記載物件の公募を行ってきた経緯がある<sup>(1)</sup>。これらの中からユネスコに推薦する資産が選ばれるわけであるが、各国から年に1件のみの推薦となっており、さらに2019年から自然遺産・複合遺産も合わせて年に1件のみに限定されたことも相まって、推薦決定までに時間を要することになった。「北海道・北東北の縄文遺跡群」の場合、2009年に暫定一覧表に掲載されてから足掛け12年かかったことになる。

「北海道・北東北の縄文遺跡群」が国内推薦を得るために乗り越えなければならないハードルはいくつかあったが、当初から問題視されてきたのが「なぜ推薦対象がこの地域に限られるのか」という点である。2008年度の文化審議会文化財部会（世界文化遺産特別委員会）の縄文

遺跡群に対する審議結果<sup>(2)</sup>について、少し長くなるが引用してみよう。

「(中略) 世界の他の地域の新石器文化に見られる農耕・牧畜とは異なり、約10,000年にもわたって継続した狩猟・漁労・採集の生活の実態を表す日本列島独特の考古学的遺跡群である。日本の歴史のうち、このように長期にわたって継続した先史文化を表し、自然と人間との共生を示す考古学的遺跡として、顕著な普遍的価値を持つ可能性は高い。ただし、北海道・北東北地域の縄文遺跡が物語る生態系や土器文化圏(円筒・亀ヶ岡土器文化圏)に特に注目するとしても、縄文文化が持つ顕著な普遍的価値を証明するためには、北海道・北東北地域の遺跡のみでは必ずしも十分ではない(中略)」

日本列島でしか見られない「縄文文化」の価値を証明するためには、一つの地域の遺跡群では不十分であるという判断が働いているのは確からしい。そのため、東日本の他の地域から構成資産を追加することが求められていたのである。なお、世界遺産の文脈で用いられる「顕著な普遍的価値」とは、国の違いを超えた人類全体にとっての貴重な価値という意味であるが、日本において世界文化遺産を選ぶ基準が「我が国の歴史や文化を表す一群の文化資産」である以上、列島全域に広がる「縄文文化」を代表することを証明する必要があった。

既に世界文化遺産に選ばれた国内の資産は、どのような範囲を代表するものとされているのだろうか。国外との関連が明確に示された資産は別として、日本の宗教建築・庭園文化の中心としての古都京都、浄土思想を表す平泉、日本古来の信仰と芸術の源泉としての富士山、あるいは産業国家形成を表す明治日本の産業革命遺産のように、顕著な普遍的価値の単位は広義の「日本」そのものに置かれていることが分かる。「北海道・北東北の縄文遺跡群」の場合は、その単位が「縄文文化」そのものとされたのだろう。

## 1-2. 世界遺産登録を受けて

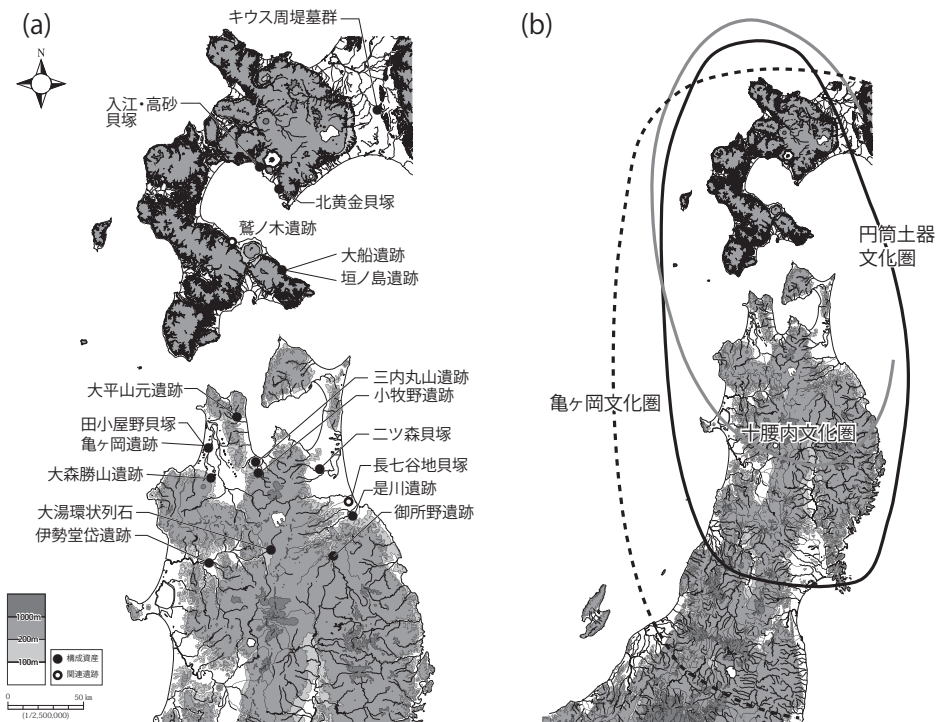
次に2020年にユネスコに提出された縄文遺跡群の推薦書(Agency for Cultural Affairs 2021)の内容を見てみよう。国内外の専門家や文化庁との協議を踏まえて、推薦書中で主張されている普遍的価値は、構成資産が総体として示す「農耕社会以前の生活の在り方」と「複雑な精神性」である。北海道・北東北の17箇所(遺跡のみを構成資産とする理由として、津軽海峡周辺における「地域文化圏」が挙げられている(第1図))。推薦書中には縄文時代に関する言及はあっても、「縄文文化」という語句は一度も用いられていない。これに対してのイコモスの評価書(ICOMOS 2021)では「縄文文化」一般についての言及が見られたものの、「縄文文化」の一部の文化圏を単位とする推薦手法自体は、特段問題なく受け入れられた。結果的に、縄文時代の遺跡を世界遺産として推薦するために、日本列島全体に広がる「縄文文化」をその対象としなくて良いと認められたことになる。

しかしながら、世界遺産の推薦単位として一つの地域が選ばれたことに対する国内の識者やメディアの意見は様々であった。1万年以上にわたる持続可能な社会を形成した「縄文文化」

そのものの価値が世界に認められたとの評価（菊池2021）や、推薦対象を拡大して、構成資産を増やすべきとの提言がなされた<sup>(3)</sup>。特に後者には、縄文時代の遺跡ならば日本列島全域が対象とされるべきとの考え方が根底にあることが窺える。「北海道・北東北の縄文遺跡群」そのものへの評価とはあまり関係がなく、むしろ世界遺産とはどうあるべきかという視点が絡むだけに、考古学の研究者であるか否かにかかわらず様々な意見があり得るだろう。

筆者が着目したいのは、世界遺産というフィルターを通して、「縄文文化」に含意される複層性と、それに対する認識の違いがわかりやすい形で示された点である。今回の推薦で用いられた「地域文化圏」は、推薦書中で明示されていないが「縄文文化」を構成する一要素として描かれている。農耕を持たず、狩猟・漁撈・採集を生業の基盤とすることが「縄文文化」全体に共通する特徴であることを前提にして、北海道・北東北という一つの「地域文化圏」に特有の文化要素を推薦の核としている。つまり「縄文文化」に様々な文化圏があることを認めた上で、その一部であっても顕著な普遍的価値を有するという論理構成である。

いま「縄文文化」の複層性を前提にした論理構成に違和感が持たれているとするならば、個々の「地域文化圏」は世界遺産の単位には相当しないという判断が下されている事になるのだろう。世界遺産とは人類共通の財産なのだから、いかなる価値基準についても尊重すべきである。筆者が着目したいのは、日本考古学において「縄文文化」のもつ複層性がどう論じられてきたのかという点と、世界遺産というフィルターを通した時に、その複層性がどのように取り扱われるのかの2点である。



第1図 「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産 (a) と地域文化圏 (b)

## 2. 「縄文文化」とは何か

### 2-1. 縄文土器と「縄文文化」

世界遺産に関しての話題を一旦離れて、これまで「縄文文化」がどのように定義づけられてきたのかを考えてみたい。日本考古学では多くの「縄文文化」論が記されてきており、それらを全て紹介することは筆者の力量を超えるものであるし、本稿の目的から外れてしまう。ここでは「縄文文化」という用語がどのような意味合いで用いられてきたのかという観点に着目して、関連する研究を取り上げることにしたい。

そもそも考古学でいう「文化」とはどのような概念なのだろうか。最も古典的な定義はチャイルドによる「共存諸型式の常時的組み合わせ」(Childe 1956) というものである。考古学者が分析対象にするのはまず出土遺物なのであるから、土器、石器、金属器、装飾品などの様々な道具立てを整理・分類した結果、共通した組み合わせ (assemblage) がいくつかの遺跡で見られる場合に、その分布範囲を含めて一つの「文化」が定義されることになる。出土遺物の組み合わせからボトムアップ方式で提示するものであるため、個々の「文化」の地理的・時間的範囲は限られ、その上位概念が必要になってくる。クラークは、「文化」の上に「文化群」および「テクノ・コンプレックス」概念を置くことで問題解決を図った (Clarke 1968)。対象とする時代や地域によって異なるとは言え、考古学で用いられる「文化」(culture) とは、多かれ少なかれ複層的理解の上に成り立っているとみて差し支えない。

このような考古学的「文化」に照らしてみると、日本列島では強固な同一性があることを前提として、「縄文文化」と縄文時代とが同一視されるという特徴がある (高瀬2014、山田2018)。その要因として考えられるのが、縄文時代を特徴づける縄文 (土器の表面に残る縄原体の痕跡) の名称が冠された縄文土器の定義である。単なる学術用語の域を超え、今や社会に普及したと言っても良い縄文土器であるが、この命名方法は世界の考古学の中で決して一般的ではない。旧石器時代を除いて、1万年以上も継続した先史「文化」自体が極めて珍しいのに加え、考古学的「文化」の名称がそのまま土器全体を示す用語になっているためである。なぜこのような命名がなされているのだろうか。

よく知られているように、縄文土器の名付け親は、大森貝塚 (東京都品川区) で初めて近代的な発掘調査を行った E.S モースである (モース1983)。モースが出土土器の総称として用いた cord marked pottery が縄文 (式) 土器と和訳され、それ以前の名称に代わって用いられるようになった。縄文土器を日本列島内で孤立して発達したものとみなし、全国的編年の大綱を作ったのが山内清男である (山内1937)。山内は縄文 (山内は「紋」を用いた) 土器の一系統的な変化を強調し、時代の名称としての縄文 (式) 文化と不可分のものとして位置付けた。研究史の流れとしては、最初に縄文 (式) 土器という呼称があり、それが用いられた先史時代の「文化」として「縄文文化」が定義され、後に縄文時代という名称が用いられるようになった<sup>(4)</sup>。

さらに縄文土器という名称だけでなく Jomon pottery という英訳も定着していった<sup>(5)</sup>。モースが用いた cord marked pottery という名称が海外の研究者にも用いられなかったのは、縄文が



施されるか否かに関係なく、日本列島の「縄文文化」・縄文時代に作られたものという意味合いが付されるからであろう。逆説的ではあるが、あらかじめ縄文土器という名称があって普及していたために、「縄文文化」(Jomon culture) および縄文時代 (Jomon period) は、一体性を持って語られることになったのである。

今日の日本考古学において「縄文文化」は、更新世から完新世にかけて日本列島で起きた環境変動に対して、人類が適応して形成された「文化」と理解されている。その出現期の土器群に縄文が見られないとしても、世界的に見て飛び抜けて古いということ自体が「縄文文化」の特殊性とされる以上(今村2004)、縄文土器という概念と切り離して説明するのは大変難しい。同じことは縄文時代の終わりにも当てはまる。西日本の縄文晩期に通有の黒色磨研土器に縄文が見られないとしても、同時期における他地域の土器群と全く無関係に存在するわけでもないため、縄文土器の範疇から除外してしまうとかえって混乱を招くことになる。

## 2-2. 「縄文文化」の複層性

それでは、戦後海外の研究者に指摘されたように<sup>(6)</sup>、日本考古学では「縄文文化」についての複層的理解は生まれなかったのだろうか。むしろ、山内清男等の先駆的業績を基礎に、膨大な発掘調査件数に支えられて精緻な土器型式学を発展させてきたため、「縄文文化」の複層性は解明されてきたと言える。土器型式名を冠しての「～式文化」や、複数の土器型式からなる土器様式圏、あるいは土器様式からなる領域が設定されてきた(鎌木1965、小林1983)。『縄文土器大観』(1989年、小学館)や『総覧縄文土器』(2008年、アム・プロモーション)などを見れば、世界的に見ても極めて精緻な土器編年と共に、構造的理解が進んできたことは明らかである。「北海道・北東北の縄文遺跡群」の推薦書も、このような研究史を下敷きにして「地域文化圏」<sup>(7)</sup>を設定していることはもっと強調して良いのではないか。

しかしその複層性が、土器型式、あるいは土器様式という形以外で語られることは少なかったように思われる。「縄文文化」という用語が引き続き用いられている以上、下位に位置付けられる考古学的な「文化」設定が、もっとなされることも可能だったはずである。例えば「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産の一つである、大平山元遺跡(青森県外ヶ浜町)から出土した無文土器は、約1万5～6千年前に遡る列島最古の土器であり、石器「文化」である「神子柴・長者久保文化」に伴うものとされた(谷口・川口2001)。その位置付けは研究者間で異なるが、仮に縄文時代草創期と見るならば、「縄文文化」の中にある土器・石器からなる「文化」として位置づけられることも可能であった<sup>(8)</sup>。他にも土器型式名を付した「文化」の研究事例はあるが、土器研究に労力が割かれたのに比して、石器など他の遺物を含めた「文化」に関する議論が低調であったことは否定できない(大工原2008)。

また、日本考古学を研究対象とした海外の研究者の目には、「縄文文化」が「文化」として取り扱うには広すぎる概念に映ったようである。例えばチャードは、縄文時代に外部の影響がほぼ見られない「閉じたシステム」があったとした上で、そのシステムを Jomon tradition と表現している(Chard 1974)。ここでいう伝統(tradition)とは、北米考古学で一般的に用い

られる、「文化」よりも上位に位置付けられる概念である。またラウスは「縄文文化」を「文化複合」(cultural complex)として取り扱い、多くのサブシリーズから構成されていたとしている(Rouse 1986)。同様の指摘は近年バーンズも行っている(Barnes 2015)。このような経緯があったにもかかわらず、日本人研究者によって書かれた英文書籍(Kobayashi et al 2004, Habu 2004)でも総称としての「縄文文化」が用いられているため、文化的な共通性や特殊性が強調されて伝わっている可能性がある。

近年、従来の「縄文文化」論を再考する議論が起こっているが(高瀬2014、山田2015・2018、谷口2019)、古くからなされていた外部からの指摘に応えつつ、「縄文文化」の複層性について改めて検討し、誰の目から見ても分かりやすいように概念整理を行う必要があるのではないだろうか。

一方、「縄文文化」とは何か、人類史上の位置付けはどうあるべきかという議論がなされていることについても触れておこう。今村啓爾によって「縄文文化」(の特に後半期)が、「森林文化に適応した形での食糧生産」に特徴を持つ「森林性新石器文化」に相当するという見解が示されている(Imamura 1996、今村2004)。また様々な研究者によって東アジア、極東地域の新石器文化との関係性について検討が行われているし、近年急速に進んだ栽培植物の研究に関しては周辺地域との比較も盛んである。このような「縄文文化」の比較考古学的研究にとっても、複層性の認識が欠かせないものであることを付け加えておきたい。

### 3. 先史時代の世界遺産との比較

最後に、世界における先史時代の世界遺産がどのような単位をもって推薦されているのかを検討しよう。すでに1で述べた通り、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の推薦書は「縄文文化」の複層性を論拠として、「地域文化圏」に普遍的価値があるという論理に基づいている。一つの「地域文化圏」を単位とし、それを代表する遺跡群を選んで構成資産とするという構成である。他の世界遺産に関しても同様に、該当する地域のある時代(例：新石器時代)を代表するとされているのか、それとも特定の時期や考古学的「文化」を代表するものとされているかを確認する。なお先史時代の遺跡の登録数が少なかった1990年代前半以前、世界的にもよく知られた単独遺跡が世界遺産とされていた時期の資産は除外している。各遺跡の推薦書はユネスコ世界遺産センターのホームページを参照した。以下、資産名のあとに( )つきによって示すのは世界遺産一覧表に記載された年および国名である。

まず単独遺跡からなる場合を見てみよう。ギョベックリ・テペ遺跡(2018年、トルコ)は、アナトリア地域における先土器新石器時代を代表する遺跡である。推薦書では、狩猟採集民によって築かれた最古の祭祀建造物である点はもちろんのこと、紀元前9,500~8,500年と古い段階であることが強調されている。同地域の新石器時代の世界遺産は他にもあるが(チャタルホユック遺跡、2012年、トルコ)、先土器新石器時代である点を論拠に区別がなされている。また、北米大陸にマウンドを築いたいわゆる「マウンドビルダー伝統」のうち、ポバティ・ポイント

遺跡（2014年、アメリカ合衆国）は、アーカイック期（紀元前4,500年～1,000年）をさらに細分した、「ポバティ・ポイント文化」を代表する遺跡として推薦されている。同じようなマウンドを築く「文化」では、その次の時代（ウッドランド期）の「ホープウェル伝統」を代表するホープウェル・マウンド遺跡が暫定遺産となっており、さらに新しい時期の「ミシシッピ文化」を代表するカホキア遺跡が1982年に世界遺産となっている。「マウンドビルダー伝統」の中に複数の世界遺産が含まれ、それらを区別する根拠が、細かく分けられた「文化」である点に注目しておこう。

次に複数の構成資産からなる場合を取り上げよう。西アジアの「人類の進化を示すカルメル山の遺跡群」（2012年、イスラエル）は旧石器時代の洞窟遺跡群であり、前期の「アシュール文化」から終末期「ナトゥーフ文化」への移行を示す点に価値があると記述されている。ここで言う「ナトゥーフ文化」については、パレスチナにさらに二つの暫定遺産が所在しているため、今後同じ「文化」から複数の世界遺産が誕生する可能性がある。良渚遺跡（2019年、中国）の推薦書では、長江下流域における後期新石器文化のうち「良渚文化」を代表する集落遺跡とされている。中国は他にも新石器時代の暫定遺産（紅山文化遺跡群）を有しているため、今後良渚遺跡と区別して推薦が行われると予想される。2021年に記載になったものでは、「アリカ・イ・パリナコータ州におけるチンチョーロ文化の集落と人工ミイラ製法」（チリ）が挙げられる。アンデス地域のブルーセラミック期のうち、「チンチョーロ文化」（紀元前7,000～1,500年）を代表する遺産とされる。

以上の事例を見ると、世界遺産に推薦される単位は考古学的な「文化」であることが分かる。新石器時代のような大きな時代区分や、複数の「文化」を統合した「文化グループ」もしくは「伝統」を代表するという説明はなされておらず、ある時代を細かく分けた特定の時空間的範囲が推薦の単位とされているのである。世界遺産に推薦する資産の分布範囲が広すぎると不適切だとされていることや、ユネスコが文化的多様性を反映させる方針であることを受けて、このような説明が採られていると考えられる。各「文化」の地理的範囲を単純比較することは難しいが、これらが縄文遺跡群の場合の「地域文化圏」か、もっと小さな範囲に相当するということとは認めて良いだろう。

一方、広大な時空間的範囲を単位として世界遺産に推薦された事例もある。スイスなど6カ国にまたがる範囲に111箇所の構成資産を持つ、「アルプス山脈周辺の先史時代杭上住居跡群」（2011年）である。本例は他の事例と大きく異なっており、湖沼地域という環境に適した杭上住居跡という条件で全ての遺跡を集成し、世界遺産にふさわしい条件で保全されている遺跡を構成資産として選んでいる。本資産には複数の時代と「文化」が含まれることになるが、建築という通文化的な要素が重視されているので、特定の時代や「文化」が推薦の単位にはなっていない。

このように見てくると、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の場合、考古学的「文化」を世界遺産への推薦単位とする、一般的な方式が採られたとすることができるだろう。筆者が確認した限り、「縄文文化」のように複数の「文化」を包含する包括的概念を世界遺産に推薦し、認

められた事例はこれまでにないと考えられる。

## おわりに

本稿では、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が「縄文文化」の一つの「地域文化圏」を軸として世界遺産一覧表に記載されたことに加えて、「縄文文化」が縄文土器と密接不可分の概念であること、さらに複層性を持つことを論じた。これまでの日本考古学はその複層性を土器の編年研究以外で示してこなかったために、「縄文文化」が考古学的「文化」として取り扱うには広すぎる概念であるのかかわらず、その共通性のみが強調されてきた可能性があるとして指摘した。また、先史時代に属する他の世界遺産の推薦の単位を検討したところ、大部分が新石器時代などの広い概念ではなく、範囲が限定された考古学的「文化」を推薦の単位としていることが明らかになった。縄文遺跡群で採用された「地域文化圏」の考え方は、他の先史時代の世界遺産と共通する方式と言える。

世界遺産というフィルターを通してみると、改めて「縄文文化」が含意する複層性が浮かび上がってきたように思われる。「北海道・北東北の縄文遺跡群」は世界文化遺産一覧表に記載されたが、それによって「縄文文化」が有している多様性にも目が向けられる契機となることを望んでやまない。

## 謝辞

「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産の推薦書作成に関わった経験が、世界遺産とは何か、「縄文」とは何かを改めて考える契機となった。縄文遺跡群世界遺産登録推進本部、岡田康博氏、菊池徹夫先生、文化庁の皆様には様々なご教示をいただいた。末筆ながら感謝申し上げます。

## 註

- (1) 世界遺産暫定一覧表追加記載のための手続き及び審査基準は、文化庁のホームページから確認することができる ([https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/kikaku/h18/03/shiryo\\_3\\_bessi2.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/kikaku/h18/03/shiryo_3_bessi2.html))。2021年12月現在、日本の暫定遺産は5件であるが、文化審議会世界文化遺産部会は2021年3月30日付の答申で、自治体の公募制度を停止し、また推薦に向けた活動を一定期間行っていない場合は一覧表から削除することもあり得るとした。
- (2) 2008年9月26日付「我が国の世界遺産暫定一覧表への文化資産の追加記載に係る調査・審議の結果について」([https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/sekaitokubetsu/shingi\\_kekka/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/sekaitokubetsu/shingi_kekka/index.html))
- (3) 「構成資産 問われる意義」『河北新報』2020年3月17日、「『縄文』世界遺産／保全と発信 万全尽くそう」『河北新報』2021年6月3日
- (4) 山内は1930年代から一貫して時代名称としては新石器時代、文化名として縄文式文化を用いたが(山内1964)、縄文時代とも併記した(山内1969)。
- (5) Jomon Pottery という名称は海外の文献に登場し(Sansom 1931, Kidder 1957)、山内も自著の英文要旨で用いている(山内1967)。



- (6) 1946 年に来日し山内清男にも会って話を聞いたクラウスは、縄文土器に基づいて定義された「縄文文化」概念が、北米の考古学・人類学における「文化」概念からかけ離れているとして“Jomon phase”を用いるべきだとしている (Kraus 1947)。またグルートは「縄文文化」という用語に、“culture”と複数形の“cultures”両方が含意されていることを指摘している (Groot 1951)。
- (7) 津軽海峡を挟んだ地域において縄文時代全般にわたり、またその後の弥生時代以降にも続く文化圏が形成され続けたことは、多くの研究者から指摘されてきた。津軽海峡にまたがる文化圏は伸び縮みを繰り返したので、全く同じ地域が1万年以上維持されたことを意味するものではない。
- (8) その測定年代や周辺地域との比較について初めて英文で紹介した羽生淳子は、考古学的「文化」という形では示していない (Habu 2004)。一方、「神子柴・長者久保伝統 (tradition)」という位置づけ (Kaner and Taniguchi 2017) が、縄文文化の枠組みとは区別して用いているためだと考えられる。

## 参考文献

- 今村啓爾 2004 「日本列島の新石器時代」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座第1巻 東アジアにおける国家の形成』、35-63 頁、東京大学出版会
- 鎌木義昌 1965 「縄文文化の概観」『日本の考古学Ⅱ』1-28 頁、河出書房新社
- 菊池徹夫 2021 「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録とその意義－「縄文」が世界遺産になるということ－『月刊文化財』698号、5-10 頁、第一法規
- 小林達雄 1983 「縄文時代領域論」『日本史学論集 上巻』、3-29 頁、吉川弘文館
- 大工原豊 2008 『縄文石器研究序論』六一書房
- 高瀬克範 2014 「統縄文文化の資源・土地利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集、15-61 頁
- 谷口康浩 2019 『入門縄文時代の考古学』同成社
- 谷口康浩・川口 潤 2001 「長者久保・神子柴文化期における土器出現の14C年代・校正暦年代」『第四紀研究』40(6)、485-498 頁
- 根岸 洋 2021 「地下遺構と世界遺産」『月刊文化財』698号、39-44 頁、第一法規
- モース、エドワード (近藤義郎・佐原真訳) 1986 『大森貝塚』岩波文庫
- 山田康弘 2015 『つくられた縄文時代 日本文化の原像を探る』新潮選書
- 山田康弘 2018 『縄文時代の歴史』講談社現代新書
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号、29-32 頁、先史考古学会
- 山内清男 1964 「日本先史時代概説」『日本原始美術1 縄文式土器』135-147 頁、講談社
- 山内清男 1967 『日本遠古之文化 補註付・新版』山内清男・先史考古学論文集・第一冊
- 山内清男 1969 「縄文文化の社会－縄文時代研究の現段階－」『日本と世界の歴史 第1巻 古代<日本>先史－5世紀』86-97 頁、学習研究社
- Agency for Cultural Affairs of Japan, 2021 *Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan*. Nomination Dossier, UNESCO.
- Barnes, G.L. 2015 *Archaeology of East Asia: the rise of civilization in China, Korea and Japan*. Oxbow Books: Oxford.
- Chard, C.S. 1974 *Northeast Asia in Prehistory*. The University of Wisconsin Press. Wisconsin.
- Childe, V.G. 1956 *Piecing together the Past*. Routledge and Kegan Paul
- Clarke, D.L. 1968 *Analytical Archaeology*. Columbia University Press: New York.
- Groot, G.J. 1951 *The Prehistory of Japan*. Columbia University Press: New York.
- Habu, J. 2004 *Ancient Jomon of Japan*. Cambridge University Press: Cambridge.
- Habu, J., Fawcett, C. 1999 Jomon archaeology and the representation of Japanese origins. *Antiquity*

73: 587-593.

- ICOMOS. 2021 *Jomon Prehistoric Sites (Japan) No.1632*, Advisory Body Interim Report. (<https://whc.unesco.org/en/list/1632/documents/>)
- Imamura, K. 1996 *Prehistoric Japan: new perspectives on insular East Asia*. University of Hawaii Press: Honolulu
- Kaner, S. and Taniguchi, Y. 2017 The Development of Pottery and Associated Technological Developments in Japan, Korea, and the Russian Far East. In: Habu J., Lape P., Olsen J. (eds) *Handbook of East and Southeast Asian Archaeology*. pp. 321-345. New York: Springer.
- Kidder, J.E. 1957 *The Jomon Pottery of Japan*. Artibus Asiae Publishers: Ascona, Switzerland.
- Kobayashi, T., Kaner, S., Nakamura, O. 2004 *Jomon Reflections: Forager life and culture in the prehistoric Japanese archipelago*. Oxbow Books: Oxford.
- Kraus, B.S. 1947 Current problems in Japanese prehistory. *Southwestern Journal of Anthropology*. 3 (1) : 57-65.
- Rouse, I. 1986 *Migrations in Prehistory: Inferring Population Movement from Cultural Remains*. Yale University Press. : New Haven and London (アーヴィング・ラウス (小谷凱宣訳) 『考古学への招待 (先史時代の民族移動)』 岩波書店)
- Sansom, G. 1931 *Japan: A Short Cultural History*. Creset Press: London.